認知資源と動機が態度変容に及ぼす影響

○佐藤安美¹・服部雅史²・唐沢 穰¹

(¹名古屋大学環境学研究科・²立命館大学文学部)

キーワード：二重過程理論，認知資源，動機

Effects of cognitive resources and motivation on attitude change

Ami SATO¹, Masasi HATTORI¹ and Minoru KARASAWA²

(¹Graduate School of Environmental Studies, Nagoya Univ., ²College of Letters, Ritsumeikan Univ.)

Key Words: Dual Process Theory, Cognitive Resources, Motive

目 的

従来の二重過程理論の研究では，認知資源と動機が十分なときシステムティックに，どちらか一方でも不足するとヒューリスティックに処理されることが示されてきた。しかし説得場面においては，不安を喚起し認知負荷を操作した実験によって，高不安のとき関与が低い説得文はヒューリスティックにより処理されるが，関与が高い文はシステムティックに処理されることが示された(Sengupta & Johr, 2001)。ただし，不安の操作は動機も喚起する可能性がある。そこで本研究では，記憶再生課題によって認知負荷をより直接的に操作し，同様の検討を行った。また認知負荷が動機に影響を及ぼすかを検討するため，認知欲求を測定した。

方 法

実験参加者 立命館大学2,3年生64人(平均20.5歳，男性23人，女性40人)が実験に参加した。

実験計画 関与(高，低)と認知負荷(大，小)の2要因参加者間計画で実施した。

従属変数 7件法で卒業試験導入に対する同意度(1：非常に反対～7：非常に賛成)と卒業試験導入に対する評価(悪い～良い／愚かな～賢い／利益のない～利益のある／好ましくない～好ましい)によって態度を測定し，平均を態度得点とした。認知欲求の測定については認知欲求尺度(神山・藤原，1991)を用いた。

材料 説得文を作成するために，本実験参加者とは別の立命館大学の大学2,3年生24人(平均20.2歳，男性10人，女性14人)に，20個の文章について「大学4年生時の総合的な試験への合格という卒業要件を導入する理由として納得できる程度」を訪ねた(1：納得できない～5：納得できる)。評定の平均値が低いものから5つを選んで説得文を作成した。「卒業試験導入に関する意見調査」というタイトルと，大学名(関与低：同志社大学，関与高：立命館大学)を表紙に記載した冊子を用意し，実験材料とした。冊子は，大学が卒業試験の意識調査を行うために作成したものとされ，フェイスシート，送り手の情報，説得文，卒業試験に対する同意度と評価を尋ねる質問項目から構成された。

手続き インフォームドコンセントの際，カバーストーリーとして「記憶の実験である」と参加者に告げ，実験を行った。まず，記憶フェーズで数字を記憶することを求めた(負荷小：1ケタ，負荷大：8ケタ)。次の説得フェーズでは「大学公式の卒業試験導入に関する意識調査である」というカバーストーリーを告げ，冊子に回答をお願いした。最後の再生フェーズで認知欲求の尺度に回答し，数字の再生を求めた。実験終了後にデブリーフィングを行った。

結 果

記憶再生課題の正答率について，認知負荷小条件では

図1 群ごとの態度得点。エラーバーは標準誤差を示す。

96.9%，認知負荷大条件では53.1%であった。認知負荷の操作は有効であったと言える。

卒業試験導入に対する態度得点(クロンバック $\alpha = 0.87$)の群ごとの平均値を図1に示す。関与の主効果のみが見られ，関与高条件が関与低条件より有意に高かった， $F(1, 60) = 6.94$ ， $p = .011$ 。認知欲求については，関与の主効果，認知負荷の主効果，交互作用のいずれも有意ではなかった， $F(1, 60) = 1.75$ ， $p = .19$ ， $F = 0.27$ ， $p = .61$ ， $F = 1.99$ ， $p = .16$ 。

考 察

認知欲求を動機の尺度として用いたが，どの群間でも違いがなかった。認知欲求が状況で変化する動機の測度として不適切であったと考えられる。

認知負荷の操作は確認されているが，関与高条件の態度得点に違いがなかったことから，認知資源が低下しても，関与の高い文章はシステムティックに処理されることが示唆された。可能性として，認知資源よりも関与がより重大にパフォーマンスに影響を与えることが考えられる。しかし関与低条件でも同様に認知負荷の条件による違いはなかった。関与低の操作が動機を過剰にそいだため，負荷の操作の影響が見えなくなった可能性が考えられる。

今後の課題は，他の二重過程理論の枠組みで同様の検討を行うこと，そして状況で変化する動機の測度として何が適切か検討し直し，再度測定することである。

引用文献

- Sengupta, J., & Johar, G. V. (2001). Contingent effects of anxiety on message elaboration and persuasion. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *27*, 139-150.
 神山貴弥・藤原武弘(1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, *6*, 184-192.